農業生産法人
ブルーヴィ 株式会社
【圃場・事務所】
長野県小県郡青木村殿戸 206-3

豊富な知識と人脈で「儲かる農業」を模索し若い農家に農業の面白さを伝えたい

代表取締役　**傳田 直彦**

ミニトマトの養液栽培及び、地元・長野で穫れた農産物の卸業を手掛けている『ブルーヴィ』。傳田社長は 20 年近く青果の販売に携わって培った知見を活かして事業を推進し、設立間もないながらも着実に実績を伸ばしている。本日は社長のもとをダンカン氏が訪問し、インタビューを行った。

――傳田社長の歩みから伺います。

学業修了後、鉄鋼会社を経て、東京の子会社で 13 年ほど働いていました。そうした中、父が体調を崩したことを受けて地元・長野に戻り、家業のリンゴ農園で 1 年ほど農業に従事。ただ、バブル崩壊後の当時は農産物の売れ行きが悪く、家業を離れることに。折角なら農業に関連する仕事をと考え、農産物の卸会社に入社して 19 年間勤めました。

――長く経験を積まれたのですね。

ええ。19 年間歩む中では役員を務め、全国の農園や市場、小売店などに出張し、農産物に関する知識と人脈を構築することができました。ただ、実家が農家なこともあって、当初からいずれは自分で生産も手掛けたいと考えており、52 歳で退職。長くお付き合いをさせていただいている鉄鋼会社の社長に、今後のことを相談すると、「ちょうどベビーリーフを栽培していたこのハウスが空くからやってみないか」とお声掛けいただき、ミニトマトの栽培を始めました。

――なぜ社長は引き続きベビーリーフではなく、ミニトマトの栽培を？

前職場での経験からベビーリーフがそれほど売れるものでないことは分かっていましたから。また、路地栽培にはある程度の面積が必要です。それで今ある設備を最大限に活かすならトマトだろうと。幸いなことに前職場のつながりでトマトを栽培されている方から指導していただくことができるなど、周囲の方々に支えていただいて今がありますから、皆さんには感謝の念が尽きません。

――ミニトマト栽培は順調に？

農産物は天候に左右されますから、試行錯誤の日々ですね。当農園では養液栽培を行っており、ヤシの実を砕いたチップを培地にして苗を植えつけ、その培地に点滴した養液を吸ってミニトマトが大きくなる仕組みです。同じ濃度の養液でも品種によって吸い方が違い、味が異なってくるので面白いですね。他にも、通常ミニトマトは 1 本のメインの木から脇芽が出て実がなるんですが、それでは夏場の 2、3 カ月しか収穫できません。そこで私共は今、脇芽を全て摘み、メインの木になったミニトマトを大きくしつつ、より長い期間収穫できるようにする実験をしているところです。

――試行錯誤次第でより美味しくなったり、たくさん収穫できたりするのは、面白いですし、やる気にもつながりますね。

ええ。一般的に農業は儲からないというイメージがありますが、やり方次第で確実に利益が得られる仕事だということを、より多くの方に知ってもらいたいですね。たとえば、私共は今ミニトマトの生産と平行して長野県産の農産物の卸業も手掛けています。そんな風に市場を介さないで販売し、生産者がきちんと利益を得られる方法もあるということを生産者に伝え、ひいては若者の農業離れを防ぐ一助となれれば嬉しいですね。そして私も当農園を基盤に他の農産物の生産にもチャレンジし、これまで培った人脈を通じてさらに販路を拡大して、事業を成長させていきたいです。

（取材／ 2018 年 11 月）

ゲスト　**ダンカン**

「栽培されているミニトマトを数種類試食させていただきました。それぞれ甘味のバランスが違って美味しく、傳田社長の日々の努力が窺えましたね。今後も消費者と生産者の双方が笑顔になれるミニトマトづくりを続けていって下さいね」

© 2019 KOKUSAI-TSUSHINSHA Co.,Ltd.